

# 職能成長養成モデルに基づく教育実習の取組における教育実習生の学びの足跡 —教育実習アセスメントプロジェクトの実施とその可能性—

米沢 崇

(奈良教育大学職能成長プロジェクト)

中井 隆司

(奈良教育大学教職大学院)

伊藤 剛和

(奈良教育大学学術情報教育研究センター)

竹内 範子

(奈良教育大学附属幼稚園)

坂下 伸一

(奈良教育大学附属小学校)

井村 健

(奈良教育大学附属中学校)

Professional Development of the Student Teachers through the Student Teaching:  
The Practice & Potentiality of the Project for Student Teaching Assessment

# 職能成長養成モデルに基づく教育実習の取組における教育実習生の学びの足跡 —教育実習アセスメントプロジェクトの実施とその可能性—

米沢 崇

(奈良教育大学職能成長プロジェクト)

中井 隆司

(奈良教育大学教職大学院)

伊藤 剛和

(奈良教育大学学術情報教育研究センター)

竹内 範子

(奈良教育大学附属幼稚園)

坂下 伸一

(奈良教育大学附属小学校)

井村 健

(奈良教育大学附属中学校)

## Professional Development of the Student Teachers through the Student Teaching: The Practice & Potentiality of the Project for Student Teaching Assessment

Takashi Yonezawa

(Project for Professional Development, Nara University of Education)

Takashi Nakai

(SPDE, Nara University of Education)

Takekazu Ito

(Center for Academic Information, Nara University of Education)

Noriko Takeuchi

(Kindergarten, Nara University of Education)

Shinichi Sakashita

(Elementary School, Nara University of Education)

Takeshi Imura

(Junior High School, Nara University of Education)

**要旨：**奈良教育大学職能成長プロジェクトでは、4週間教育実習において開発した「教育実習支援システム」を用いた教育実習生の実習授業の振り返りの取組（教育実習アセスメントプロジェクト）を実施した。

本取組では、平成22年9月と平成23年9月に行われた4週間教育実習において、実際に教育実習で教育実習生が取り組む内容と職能成長養成モデルの各ステージを関連付け、職能成長養成モデルのサイクルを循環させた。得られた成果として、教育実習終了後に教育実習生は教育実習支援システムを利用し、自らの実習授業を視聴し振り返ることによって、授業（保育）の進め方や子どもとのかかわり方、教材・教具の使い方に関する良かった点や改善点、改善策について言及していた。

**キーワード：**職能成長養成モデル professional development model、教育実習 student teaching、  
教育実習生 student teacher、省察 reflection

### 1. はじめに

本稿では、ICTを用いた職能成長養成モデルに基づ

く教育実習授業の振り返りの取組と、その取組を通じての教育実習生の学びの足跡について報告する。

Schön (1983) が「技術的合理性」に基づく「技術

的熟達者」から「行為の中の省察」に基づく「反省的実践家」という新しい教師像を提唱して以降、教育現場では、「反省的実践家」として省察力と課題解決力を備え自己成長できる教員、すなわち、「職能成長能力<sup>注1</sup>」を備えた教員が求められている。また、中央教育審議会の「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」（2006年7月）や、「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（2008年12月）においても、教員養成の質的向上に踏み込んだ改革がそれぞれ提言されている。

このような社会からの要請に対して、教員養成系大学・学部では、教員養成カリキュラムの質保証に向けて、カリキュラム・デザインや授業内容・方法を知識注入型・トレーニング型の教員養成から省察型・自己成長型の教員養成へと転換し、職能成長能力を備えた教員を養成するための改革が活発に行われている（中井、2009；米沢他、2011）。とりわけ、事前・事後指導を含む教育実習プログラムにおいては、教育実習生の職能成長能力を向上させるために様々な取組が行われている。例えば、秋田大学教育文化学部では、省察を基盤とした教育実習生による自身の授業分析と実習日誌分析の2つを組み込んだ教育実習事後指導プログラムを開発・導入した結果、導入したプログラムが教育実習を通しての教育実習生自身の成長過程や今後の課題を明確化させるなど、教育実習生が実習経験を省察する上で有効であることを確認している（姫野他、2006）。また、近年ではビデオカメラを用いて実践映像等を撮影し、e-learningシステム等で自身あるいは他者の実践を振り返るなど、ICTを活用して教育実習生の職能成長を支援する取組も行われてきている。鳴門教育大学では、「鳴門教育大学授業実践映像データ

ベース」を開発し、教育実習における教育実習生の授業実践映像等を蓄積するとともにWeb上で教育実習生の実践の省察を支援する取組を通じて、教育実習生が自身あるいは他者の授業実践映像を視聴し、コメントすることで彼らの省察が促進されたと報告している（藤原、2010）。

このような動向の中、奈良教育大学では、平成21年度より「学生の職能成長過程と一体化した統合的教職実践演習のモデル開発—職能成長養成モデルとアセスメントに基づく学士力の保証—」（以下、職能成長プロジェクト）に取り組んでいる。この職能成長プロジェクトでは、4年間の学生の職能成長過程と一体化した統合的教職実践演習のカリキュラム及び授業モデルを開発することを目的としている。とりわけ、「実践デザイン」「実践」「アセスメント」「目標設定」「改善・学習」の各ステージのサイクルを循環させる「職能成長養成モデル」に基づいて職能成長能力を備えた教員の養成を目指し6つの下位プロジェクトを実施している<sup>注2</sup>。

本稿では、その1つである「教育実習アセスメントプロジェクト」の取組を取り上げる。このプロジェクトでは、職能成長養成モデルに基づく「実践デザイン」「実践」「アセスメント」「目標設定」「改善・学習」の各ステージを取り組みの中に導入している。具体的には、「指導案・教材の作成（実践デザイン）」「実習授業の実施（実践）」「自らの実習授業映像の視聴と振り返り（アセスメント）」「改善点を把握するための観点別目標の設定（目標設定）」「改善点の把握と改善策の提示（改善・学習）」という形で、実際に教育実習生が取り組む内容と職能成長養成モデルの各ステージを関連付けながら、職能成長養成モデルのサイクルを

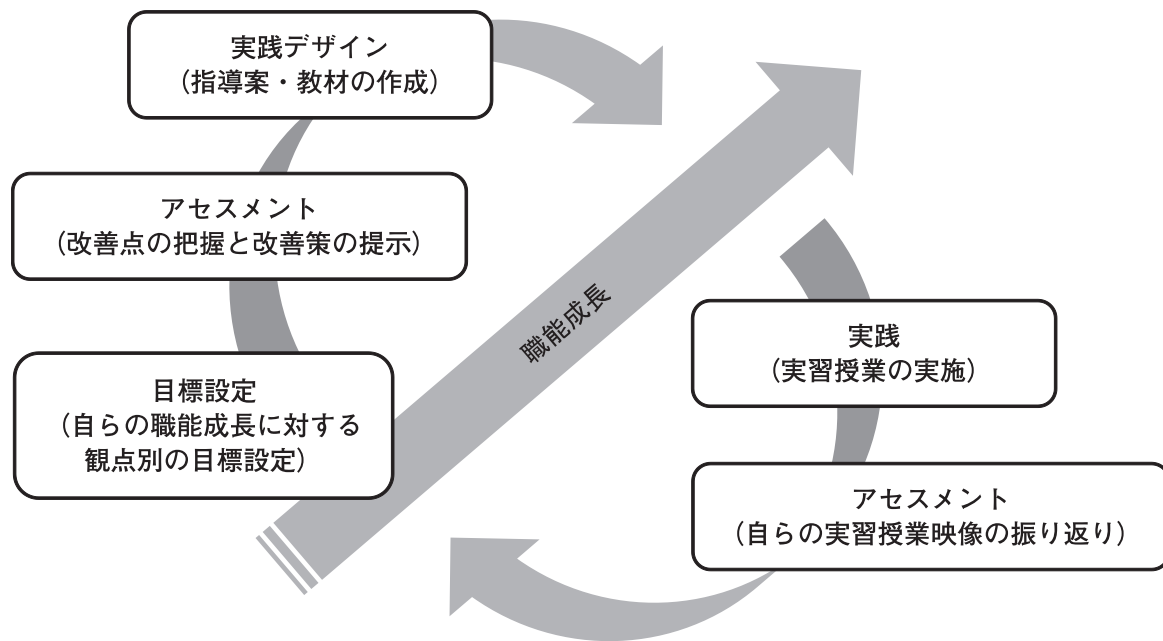


図1 職能成長養成モデルと教育実習生が取り組む内容との関連

循環している（図1）。なお、本取組では、教育実習生がデータのアップロードや振り返りなどの作業を円滑に行うことができるように、インターネットを介して実習授業の映像データ等をアップロードする機能と実習授業映像を視聴しコメントを入力する機能を有した「教育実習支援システム」を開発・利用した。

以上の取組を通じて、教育実習生が自らの実践を振り返ることで教育実習生に自己を対象化させ、良かった点、改善点やその改善策を具体的に見出させるとともに、教育実習生自身の職能成長を促すことが期待される。

## 2. 本取組の実施概要

### 2. 1. 本取組の計画と方法

平成22年9月と平成23年9月に行われた4週間教育実習を対象に、以下の計画と方法で本取組を実施した。なお、協力者は本学の附属学校園と奈良市内協力校において教育実習を行った学校教育教員養成課程の3回生55名（平成22年度計19名：附属幼稚園3名：附属小学校6名：附属中学校10名、平成23年度計36名：附属幼稚園5名：附属小学校16名：附属中学校9名：協力校<sup>注3</sup>6名）であった。

#### 2. 1. 1. 教育実習期間中

教育実習生は実践する実習授業の学習指導案の作成し、その後、実習授業を実施した。さらに、その内容をデジタルビデオカメラで収録し、その日の放課後にデジタルビデオカメラをノートパソコンに接続し、教育実習支援システムのアップロード機能を用いて実習授業の映像データを実習校から大学内のサーバにアップロードした。なお、この作業は教育実習前半と後半の実習授業の計2回行った。

#### 2. 1. 2. 教育実習終了後

教育実習生は教育実習支援システムにアクセスし、教育実習前半と後半の計2回の実習授業の映像を視聴する。さらに、自らの実践を振り返り、コメントを入

力した。その際、教育実践経験の浅い教育実習生に、何の指示や観点もなく、いきなり振り返りを行わせることは困難であることが予想された<sup>注4</sup>。そこで、先行研究で実践されている振り返りの観点（長谷川他、2003）と段階（Tsangaridou and O'Sullivan, 1994）を参考に作成された「授業（保育）の進め方」「子どもとのかかわり」「教材・教具の使い方」の3観点について「良かった点」「改善点と改善策」の2段階で、自身の実践を振り返り、コメントを入力するように指示した。

### 2. 2. 教育実習支援システムの概略

ここでは、教育実習生が行う映像データのアップロードや振り返り等の作業を支援するために開発した「教育実習支援システム」の機能の概略について述べる。

#### 2. 2. 1. 映像データのアップロード機能について

映像データをアップロードするためのシステムを利用するには、ユーザ名とパスワードを入力しログインする。ログイン後は、図2のような画面が表示され、教育実習前半と後半の実習授業のどちらであるのかを選択するなど、所定のメニューに沿って操作することによって、実習授業の映像データを実習校から大学内のサーバにアップロードすることができる。

#### 2. 2. 2. 実習授業の視聴・コメント入力機能について

実習授業を視聴し、コメント入力するためのシステムを利用するには、ユーザ名とパスワードを入力しログインする。ログイン後は、アップロードされた動画の情報（授業名、授業実施日、実習校名、学年等）を入力するなど、所定のメニューに沿って操作することによって、図3のような画面が表示される。

実習授業を視聴し、コメント入力する機能については次の通りである。1) 授業映像とコントローラーでは、教育実習生自身の実習授業の映像が上部に表示され、下部のコントローラーで再生・停止・コマ送り・

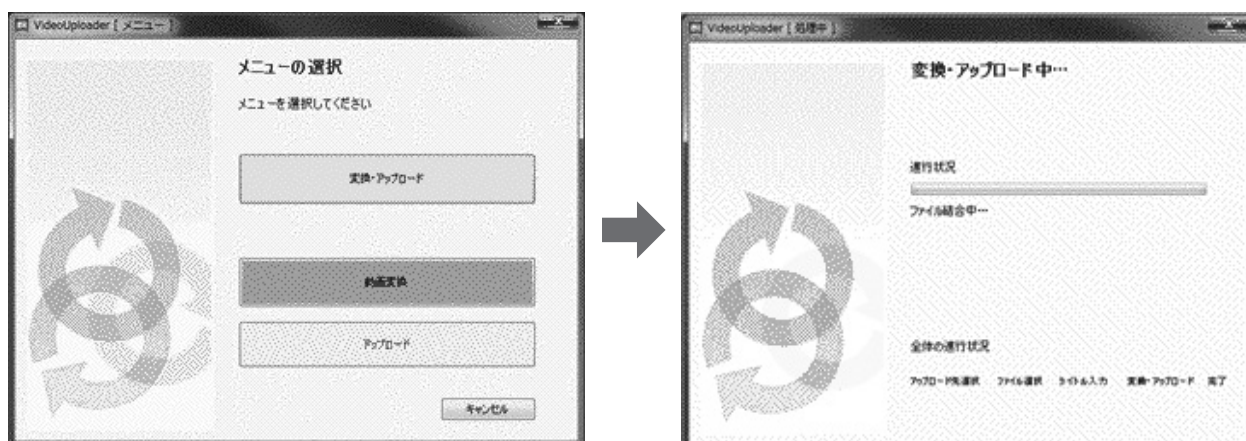


図2 映像データのアップロード機能の画面



音量調整等の操作ができる。2) コメント入力フォームでは、教育実習生が自身の実習授業に対して先述した「授業（保育）の進め方」「子どもとのかかわり」「教材・教具の使い方」の3観点のいずれかを選択し、良かった点や改善点・改善策についてのタイトルや具体的なコメントを入力することができる。さらに、本システムの特徴として授業映像の時間（秒単位）と振り返りのコメントがリンクしており、教育実習生は自身の実習授業の各場面で気づいた良かった点や改善点・改善策について詳細にコメントを入力することができる。3) コメント表示欄では、コメントを入力した時間帯やタイトル名等が表示される。また、タイトルをクリックすると、その時間帯の授業映像とコメントタイトルが画面に表示される。4) 動画情報では、授業名、授業実施日、実習校名、学年などといった実習授業の映像の情報が表示される。5) 関連資料では、アップロードした実習授業の学習指導案等のファイルを閲覧できる。

### 3. 本取組の成果と教育実習生の評価

#### 3. 1. 自らの実践の視聴と振り返りによる教育実習生のコメント

以下では、教育実習支援システムを用いた教育実習生の授業映像の視聴と振り返りによるコメントの内容について検討する。本取組では教育実習前半と後半の実習授業それぞれの振り返りを行っているが、本稿では紙面の都合上、教育実習後半の実習授業に対する振り返りのコメント内容について報告する。その理由は、ある程度教育実習経験を積んだ上で実施された教育実習後半の実習授業の方が教育実習生自身の振り返りを促進する情報を多く含んでいると考えたからである。なお、良かった点に関するコメントの総数は228件、改善点とその改善策に関するコメントの総数は340件

であった。教育実習生の入力したコメントは先述した3つの観点とその内容ごとに著者らが整理した。

#### 3. 1. 1. 自らの実践の良かった点に関する教育実習生のコメント

自らの実践の良かった点に関する教育実習生のコメント（総数228件）をみると、授業（保育）の進め方についての記述が109件、子どもとのかかわり方についての記述が81件、教材・教具の使い方についての記述が34件であった（表1）。以下では、3つの観点別にみた自らの実践の良かった点に関する教育実習生のコメント内容について報告する。

まず、授業（保育）の進め方については、「友達と楽しい気持ちを共有してほしかったため、楽しい話をする予定にしていたが、一応その話を組み込めるようにはなっていた。1回目の保育のときは保育に必死で全然かけられなかったため、少しは改善できたのではないかと感じる。」<sup>④</sup>注5や「目標を口頭で伝えるだけでは児童もわからなくなってしまうことがある。板書によって明確にし、これからの目的を示すことができている。」<sup>④</sup>というコメントがみられた。

つづいて、子どもとのかかわり方についてのコメントをみると、「形の中に入りにくい子どもには、みんなでその子どもの名前を呼ぶことで、友達と一緒に遊びたいという気持ちが高まるように配慮したり、みんなに名前を呼ばれることで一人ぼっちにならないように配慮していた。」<sup>④</sup>と振り返る教育実習生がいた。また、「1回目よりも声が大きく、はっきりとしている。子どもたちの発言を聞き、必要な発言を拾うことが出来ている。子どもたちの発言を受けて、発問をし、授業を構成していこうとしている。」<sup>④</sup>や「個人に対して、前回より分かりやすい説明ができています。（生徒が理解できています）」<sup>④</sup>とコメントする教育実習生もいた。

さらに、教材・教具の使い方について「最初にプリ



図3 実習授業の視聴・コメント入力機能の画面

表1 教育実習後半の実習授業の振り返りによる教育実習生の記述（基礎集計）

	平均	標準偏差	一人あたりの 最小記述数	一人あたりの 最大記述数	総数
【授業（保育）の進め方】					
良かった点	2.05	2.39	0	12	109
改善点とその改善策	3.00	2.34	0	10	159
【子どもとのかかわり方】					
良かった点	1.53	2.00	0	12	81
改善点とその改善策	1.66	2.03	0	11	88
【教材・教具の用い方】					
良かった点	0.64	1.06	0	5	34
改善点とその改善策	1.28	1.35	0	7	68
【その他】					
良かった点	0.08	0.33	0	2	4
改善点とその改善策	0.47	1.40	0	8	25

※コメント数は平成23年12月9日時点で算出している。また、撮影時のトラブルで教育実習後半の映像が記録できなかった2名を除く53名の平均値を算出した。

ントを配布せずに、まず黒板に集中させることで全体の集中を高めることができる。児童の学習への集中がある程度高まった後に配布したことはよかったと思う。」④と記述する教育実習生や、「前回の授業でプリント配布に時間をとられてしまった反省より、今回はあらかじめ班の人数分ずつプリントをわけておいたのでスムーズに渡すことができた。」④というコメントもみられた。

以上のことから、教育実習終了後に教育実習生が自らの授業映像を視聴し、振り返ることで彼らが授業の進め方や子どもとのかかわり方、さらには教材・教具の用い方についてポジティブな側面を見出しているとともに、その理由についても言及していることが指摘できる。

### 3. 1. 2. 自らの実践の改善点とその改善方法に関する教育実習生のコメント

自らの実践の改善点とその改善方法に関する教育実習生のコメント（総件340）をみると、授業の進め方についての記述が159件、子どもとのかかわり方についての記述が88件、教材・教具の用い方についての記述が68件であった（表1）。以下では、3つの観点別にみた自らの実践の改善点とその改善策に関する教育実習生のコメント内容について報告する。

まず、授業の進め方についてのコメントをみると、ある教育実習生は「子どもの興味が教具の方に集中し、教師の話の聞いていないので、もっとメリハリをつけるなどの工夫の方が良い。」④という改善点を見つけ、その改善策を提案している。その他、「説明での注意点が不十分であったようである。」④という理由から「実験結果に影響が出るような細かい部分は繰り返し丁寧に注意を呼びかける必要がある。」と改善策を示している教育実習生もいる。

つづいて、子どもとのかかわり方に関するコメントでは、「児童からの応答がない場合、表情に陰りがでてしまっている。」④ことに気づき、「どんなときも明

るく、児童の答えがなくても根気強く待たなければならない。」と考えた教育実習生がいる。また、別の教育実習生のコメントでは「前に出てきてもらった児童とだけのかかわりになっている。全体に広げなければならなかった。」④や「映像で見ると、関係のない話をしている子が多かったので、しっかり気づいて指導しなければいけなかった。」④という改善点と改善策を記述している。

その他に、教材・教具の用い方についてのコメントをみると、「色を伝えるときに話すスピードが速すぎて紙が子どもたちに見えていない。紙の色をしっかりと伝えるためにもっとゆっくり話すべきであった。」④や「運動のできるマットの場所が足りていない。事前に予測し、準備の際に考えておくべき。生徒に場所を指定できていないので時間がかかってしまっている。」④という改善点と改善策を記述した教育実習生もいる。ある教育実習生は「凸レンズをあてる前とあてた後の変化の違いを意識させることができていない。」④と考え、「まず、光をあてただけの様子を観察させ、その状態から凸レンズをあてて変化を意識させるようにする。」という改善策を提案している。

これらの記述に代表されるように、教育実習終了後に教育実習生が授業の進め方や子どもとのかかわり方、教材・教具の用い方に関する改善点について言及するとともに改善策を提案している。

### 3. 2. 自らの実習授業の振り返りによる教育実習生の学びの足跡

上記のコメント内容から、教育実習生自らの実習授業の視聴と振り返りによる彼らの学びの内実について以下のことが示唆される（図4）。

まず、教育実習生は自らの実践を視聴し振り返ることによって、授業の進め方や子どもとのかかわり方、教材・教具の用い方についての良かった点を把握し、その理由について言及していた。姫野他（2006）は、実習生による実習生自身の授業映像やその授業プロト

表2 本取組に対する教育実習生の評価

<p>問1. 教育実習支援システムは全体的に使いやすいですか。以下の(1)～(2)のいずれかを選択し、【 】内に理由を書いてください。</p> <p>(1) 使いやすい …44名                      (2) 使いづらい …7名</p> <p>【理由】(一部抜粋)</p> <p>○マニュアルが分かりやすく示されていたので、パソコンが苦手な自分でも進めていくことができたから。</p> <p>●授業の様子も見やすく、操作もそんなに難しくなかったから。</p> <p>○動画の画面の大きさがもう少し大きくなれば、もっと良かった。</p> <p>●映像が小さかった。板書が見にくい。</p>
<p>問2. 教育実習後に自分の授業映像を見て、自分の実習授業を振り返ることは、自分の授業の良かった点を考えることに役立ちましたか。以下の(1)～(4)のいずれかを選択し、【 】内に理由を書いてください。</p> <p>(1) 非常にそう思う …22名              (2) そう思う …24名                      (3) そう思わない …6名                      (4) 全くそう思わない …0名</p> <p>【理由】(一部抜粋)</p> <p>○授業を行ってすぐは、自分の改善点ばかりに気がいってしまい、なかなか自分の良いところに気づくことができない。映像で後日振り返ることで、客観的に考えることができるため。</p> <p>●自分の映像を見る(授業を客観的に見る)機会はそうないので、非常にためになったから。</p> <p>○自分の授業で良い点がありませんでした。</p> <p>●良かった点がありませんでした。</p>
<p>問3. 教育実習後に自分の授業映像を見て、自分の実習授業を振り返ることは、自分の授業の改善点と改善策を考えることに役立ちましたか。以下の(1)～(4)のいずれかを選択し、【 】内に理由を書いてください。</p> <p>(1) 非常にそう思う …34名              (2) そう思う …15名                      (3) そう思わない …1名                      (4) 全くそう思わない …0名</p> <p>【理由】(一部抜粋)</p> <p>○授業を行っていた時に気付けなかったことに気づくことができる。今後、自分が考え、改善すべき課題がさらに明確になるため。</p> <p>●振り返ることで自分が見えていなかったことに気付くことができるので良い。また指導教官からではなく自らの観点から振り返ることも自分の弱い所に自分で気付くことができるので良い。</p> <p>○授業で悪かったと思っていた点に加えて、映像で見ると、実習中には気付けなかった部分にも気付くことにできたから。</p> <p>●授業をしている間は軽いパニック状態なので、自分が何を言ったかも覚えていないことが多く、冷静に自分の改善点を見つけることができないので、後で映像を見た方が良いと思うから。</p>

※合計が55名にならないのは無回答があるためである。

コルを利用した省察によって、教育実習生自身が教育実習でどのように成長したのか実感していることを報告している。これらの指摘を踏まえると、本取組においても、教育実習生が自らの授業映像を視聴し振り返ることによって、自己の実践を対象化し、自らの実習授業のポジティブな側面を把握していると推察される。



図4 教育実習後における振り返りの様子

さらに、教育実習生は自らの実践を視聴し振り返りを行うことによって、授業の進め方や子どもとのかわり方、教材・教具の用い方についての改善点を見つけ、その改善策についても言及していた。先述した姫野他(2006)は教育実習後の教育実習生自身の実践の振り返りによって、彼らが今後の課題を浮かび上ら

せていることを指摘している。藤原(2010)も、教育実習における教育実習生の授業実践映像等を蓄積しWeb上で教育実習生の実践の課題を把握させている。これらの指摘を参照すると、教育実習を経験した教育実習生が本取組を通じて、自らの実践を振り返るなかで自己を対象化することによって改善点を見出し、その改善方法を提示していると考えられる。

若手教員の教育実践の反省に着目した木原(2004)は、若手教員に期待される反省という行為を問題の発見と解決に分類している。とりわけ、若手教員にはそのうちの発見に力点を置き、多くの経験を蓄積させることで、それを促すことが重要であると述べている。木原(2004)の対象は若手教員であるが、教員としてのキャリアの出発点にある教育実習生に対しても当てはまるものと思われる。これらのことから、本取組には、教育実習生に自らの教育実践にかかわる良かった点や改善点に言及させるという経験を提供できる可能性があると考えられる。

### 3. 3. 本取組に対する教育実習生の評価

教育実習支援システムを用いた作業内容の感想や本取組に対する評価などを尋ねるアンケートを実施した。表2は、アンケート項目と結果を示したものである。サンプル数が少数であるため本取組の効果を十分に把握できないが教育実習生の評価を記す。

まず、問1の回答結果をみると、教育実習支援システムの操作性については肯定的な回答が得られた。彼らが授業映像の時間と振り返りのコメントをリンクさ



せ、実習授業の各場面で気づいたことを詳細にコメント入力することができる本システムを好意的にとらえていると思われる。ただし、画面サイズについては改善を検討しなければならない。つづいて、問2と問3の回答をみると、多くの教育実習生が授業映像を振り返りことによって、自らの実践についての良かった点や改善点に気づき、改善策を具体的に提示することができ、教育実習生自身の学びの参考になったと回答していた。また、理由についての自由記述から本取組に対する好意的な感想が多くみられる一方で、改善点の把握はできたが良かった点を見出せなかった教育実習生もいたようである。

#### 4. おわりに

ここまでは、ICTを用いた職能成長養成モデルに基づく教育実習授業の振り返りの取組と、その取組を通じての教育実習生の学びの足跡について述べた。以下では、得られた知見を整理するとともに、本取組の可能性について言及したい。

本取組では、平成22年9月と平成23年9月に行われた4週間教育実習において、実際に教育実習で教育実習生が取り組む内容と職能成長養成モデルの各ステージを関連付け、職能成長養成モデルのサイクルを循環させる取組を行った。得られた結果として、教育実習終了後に教育実習生は教育実習支援システムを利用し自らの実習授業を視聴し振り返ることによって、授業（保育）の進め方や子どもとのかかわり方、教材・教具の用い方に関する良かった点や改善点、改善策について言及していた。

先述したように、近年、教員養成系大学・学部においては知識注入型・トレーニング型の教員養成から省察型・自己成長型の教員養成への転換が進められている。例えば、日本教育大学協会（2004）では、教育現場での体験の場と大学での研究的な省察の場を往還させる「教員養成コア科目群」を中核とした教員養成のモデル・コア・カリキュラムが提案されている。その中でも、教育現場での体験と大学での省察を往還させる上で事前・事後指導を含む教育実習プログラムは重要な役割を担っていると考えられる。今後、教員養成系大学・学部においては、教育実習生の省察力や課題解決力を養う取組を積極的に実践していくことが不可欠であろう。そのような動向のなかで、職能成長養成モデルに基づく教育実習終了後の実習授業の振り返りの取組は、教育実習生の職能成長に寄与する可能性が期待できる。

ただ、本取組は試行的な取組であるため、振り返りの3つの観点は主に指導方法や教材・教具に関するものを中心に共通のものを設定し、教育実習生の振り返りを促した。しかし、教育実習は多様な校種・教科・

領域で行われるため、それらの実践を振り返る観点は複雑かつ多様である。したがって、観点をより多様化していくことも重要であろう。また、今後は教育実習生自身が主体的に独自の観点を設定し、振り返ることができるように工夫していきたい。

次に、教育実習支援システムに対する教育実習生の評価結果から、彼らがICTを用いた振り返り等の作業を肯定的に評価していることがわかった。先述した藤原（2010）も、教育実習における教育実習生の授業実践映像等を蓄積しWeb上で教育実習生の実践の省察を支援する取組を通じて彼らの省察が促進されたことを報告している。本研究で得られた成果や先行研究の知見を踏まえれば、ICTを積極的に活用することは教育実習生の振り返りを促す上で有効な手法であると思われる。

最後に、本取組の今後の展開について述べたい。今回は、職能成長養成モデルを教育実習の取組に導入した。職能成長プロジェクトでは、他の下位プロジェクトにおいて、職能成長養成モデルを導入した課題解決・省察型教員養成授業モデルを構築し、大学の授業科目の一部で展開している。そこで、それら授業科目と今回の取組との関連を検討し、本学の教員養成カリキュラムの系統性や改善点を明確にしていきたい。

また、本学の教職科目である「現代教師論」においては、附属学校の授業を参観し、その気づきを（とりわけ授業場面における教師、児童生徒の動きを中心になど）詳細に記述させている。同じく教職科目である「教育方法・メディア」や各教科教育法の授業科目においても、実施された授業（模擬授業含む）についての振り返りを行わせている。これらの機会に学生が振り返った事柄と比べて、教育実習後の段階での振り返りがどの程度質的に変化したのかという点も今後検討し、学生の職能成長過程を継続的にサポートしていきたい。

加えて、平成22年度入学生から対象となる教職実践演習の実施に向けて作成されている「履修カルテ」（本学では「履修記録」と呼称）との連動を考慮し、今後、本取組を通じて得られた実習授業映像や振り返りコメント等のデータを学生の職能成長過程をアセスメントするためのエビデンスとして保存していくことも重要な課題である。

#### 注

- 1 職能成長能力とは、自己の成長段階に応じて必要な資質能力を獲得し、成長していく能力のことである（中井、2009）。米国の州間新任教員評価支援協議会が定めたINTASC（Interstate New Teacher Assessment and Support Consortium Principles）のスタンダードにおいても、新任教



員の習得すべき基本的かつ重要な能力の一つとして示されている。この能力は、本学が卒業までに獲得すべき新任教員に求められる目標資質能力として定めているカリキュラム・フレームワーク（7つの目標資質能力基準）の一つでもある。カリキュラム・フレームワークの詳細については森本他（2009）を参照のこと。

- 2 職能成長プロジェクトの概要については、本プロジェクトのホームページ（<http://pd.nara-edu.ac.jp/>）や中谷他（2010）を参照のこと。
- 3 協力校（奈良市内の公立小学校）においては、教育実習中に教育実習校の指導教員及び大学の担当教員が収録された映像にコメントなどの書き込みをすることも可能で、教育実習生は教育実習中に指導教員と一緒に書き込まれたコメントを基に授業検討会を開催することで、教育実習指導に生かす取組も行っている。この取組の成果については別稿で詳論する予定である。
- 4 澤本（1998）も、経験の浅い教育実習生や新任教員に自らの実践を振り返らせるときには、振り返り方法等について配慮が必要であると指摘している。本取組においても、教育実習を対象としていることから、振り返り方法等についてある程度配慮することが必要であると判断した。
- 5 「 」内の文章（太字・斜体）は、教育実習生の記述をそのまま引用している。㊸は幼稚園，㊹は小学校，㊺は中学校というように教育実習生が実習授業を行った実習校の校種を表している。

#### 引用文献

藤原伸彦（2010）Webを利用した省察の支援—授業実践映像データベースの開発と評価—。鳴門教育大学特色GPプロジェクト編著、教育実践の省察力をもつ教員の養成 授業実践力に結びつけることができる教員養成コア・カリキュラム、協同出版：東京、216-234。

長谷川悦示・岡出美則・高橋健夫・萩原武久・米村耕平・松本奈緒（2003）筑波大学における体育教師教育カリキュラム及び指導法の検討—「体育授業理論・実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の授業展開—。筑波大学体育科学系紀要26：69-85。

姫野寛治・渡辺淑子（2006）省察を基盤とした教育実習事後指導プログラムの開発。秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要28：165-176。

木原俊行（2004）授業研究と教師の成長。日本文教出版：大阪。

文部科学省中央教育審議会（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）。2006年7月。

文部科学省中央教育審議会（2008）学士課程教育の構築

に向けて（答申）。2008年12月。

森万奈・鐘ヶ江康裕・福本敏雄・原田奈名子（2010）佐賀大学文化教育学部学校教育課程（小学校教員養成）における体育科教育—模擬授業を中心に—。日本教育大学協会研究年報28：101-113。

森本弘一・棚橋尚子・中井隆司・渋谷真樹・赤沢早人（2009）奈良教育大学カリキュラム・フレームワーク。日本教育大学協会研究年報27：207-216。

永田智子（2007）クラスメイトと話し合う。鈴木真理子・永田智子編著、明日の教師を育てる インターネットを活用した新しい教員養成、ナカニシヤ出版：京都、44-67。

中井隆司（2009）実践家と研究者がつながる「授業研究」—教師の職能成長をサポートするアセサーとしての研究者。体育科教育57（9）：38-41。

中谷昭・中井隆司・米沢崇（2010）学生の職能成長過程と一体化した統合的教職実践演習のモデル開発—職能成長養成モデルとアセスメントに基づく学士力の保証—。文部科学教育通信243:16-17。

日本教育大学協会（2004）教員養成の「モデル・コア・カリキュラム」の検討。

澤本和子（1998）授業リフレクション研究のすすめ。浅田匡・生田孝至・藤岡完治 編著、成長する教師—教師学への誘い、金子書房：東京、212-226。

Schön, D. A. (1983) The reflective practitioner, how professionals think in action. New York: Basic Books. 佐藤学・秋田喜代美（訳）（2001）専門家の知恵—反省的実践家が行為しながら考える—、ゆみる出版：東京。

Tsangaridou, N. and O'Sullivan, M. (1994) Using pedagogical reflective strategies to enhance reflection among preservice physical education teachers. Journal of teaching physical education 14:13-23.

米沢崇・中井隆司・中谷昭（2011）ICTを用いた課題解決・省察型教員養成授業モデルの開発とその可能性の検討—職能成長養成モデルに基づく保健科教育の実践事例—。日本教育大学協会研究年報29：175-187。

#### 付記

本取組にご協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

本稿の内容は、文部科学省特別経費（プロジェクト分）事業「学生の職能成長過程と一体化した統合的教職実践演習のモデル開発—職能成長養成モデルとアセスメントに基づく学士力の保証—」の成果の一部である。